

# 幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を

松 隈 玲 子

“ゆめ”と“ゆたかさ”

「ゆめ」は時間的には未来にかかわる問題であり、発展性、可能性をもつ未知なる部分、空想的要素の強いものである。ことに既知の世界よりも未知の世界にかかわることの多い幼児にとって、おとなの目からみると、ゆめと現実との混同とみられることも、幼児自身は、既成観念にとられない、子ども自身の現実をふまえて思考し、行動している場合がしばしば見受けられる。このように、子どもの「ゆめ」は「現実」とはっきり区分して考えられるのではなく、ゆたかな現在を経験することが、未来のゆめを育てるものであることに気付かされる。

「ゆたかさ」は時間的には現在にかかわるものであり、現実的、具体的な思考・行動の中から理念的なひろがり、質的なふかまり、たかまりをもつものである。

即ち、その時、その場のものに対する皮相的なあるいは量的なつながりに終始するのではなく、そのものとの深いかわりあい

をもつと同時に、横へのつながりをもち、関係的に思考や行動を發展させていこうとするものである。

このように、「ゆめ」と「ゆたかさ」は一面からみると次元の異なるものであるが、幼児期における子どもたちの思考、心情の発達を育てるといふ立場からは、一連のつながりをもつものとして考えることができる。したがって「ゆたかさ」は現在にも未来にもかわるものといふことができるであらう。

このような立場から、幼児期における「ゆめ」を大切に育てることの意義を「自己」「人」「もの」の三つの関係を通して考えてみたい。

## ○ 自己とのかかわり

ゆめをもつといふことは、心の不安定な状態においても、心の安定した状態においても可能である。前者は自己の欲求不満を現実からの逃避という型で「ゆめみる」代償的な行動ともいえる。マッチ売の少女がこごえた手でマッチをすり、小さな手をほのお

にかざした時、ほのおの中に現れたごちそうや、ストーブや天国のおばあさんの顔は、飢えと寒さで冷えきった少女のみたまぼろしであったかも知れない。しかし少女はそのまぼろしに幸せをゆめみて昇天する。アンデルセンは、薄幸な少女に、自己とのかかわりにおいて、幸せを与え、主人公の立場にたつ読者の心になぐさめと救いをもたらせてくれる。

しかし、幼児期における「ゆめ」はこのように自己の欲求不満の代償の型で与えられるものであってはならない。

ハーロー博士のアカゲザルの実験の例にもあるように、針金の代理マザーは、授乳を可能にする哺乳びん付きであつても、子ぎるの愛情の対象とはならず、子ぎるは布製の代理マザーにしがみつぎ、その感触に心の安定を充足して後にはじめて外部のものに対する知的好奇心を示すという事例は、人間の子どもも幼児期において、母親あるいはそれに代る保育者との心の安定を得て後にはじめて、外界のものに興味をもち、かかわりをもとうとし、そこから「ゆめ」や「希望」を見出し、いこうとすることと関連して考えられる。

すなわち、自己とのかかわりにおいてもつことのできる健康な「ゆめ」は、「心の安定」をよりどころとして育くまれるものであるということが出来る。

人見知りをする子にとって見知らぬ人は、恐怖の対象でしかないし、電車のゆれるのをこわがる子は、窓からどんなに美しい虹が見えても心を動かされることがないなど、幼児期における「心の安定」の重要性は、多くの事例を通して考えることができる。

#### ○人とのかかわり

次に人とのかかわりについて考えてみよう。人とのかかわりにおいて「ゆめ」がもてるということは、「その人を信じること」から出発する。信じるということはその人をよく知ると言うことでもある。信じるということ、**「事実にもとづいて信じる」**ことと**「可能性を信じること」**の二つの立場にわけて考えてみよう。子どもが生まれて「女の子」であつた時、両親は「きれいなおよめさんになればよい」という「ゆめ」をもつ。これは女の子という事実に即した夢である。次に子どもがだんだん成長してくると「この子はお母さん似だからきつときれいなおよめさんになるだろう」という可能性を信じるゆめをもつ。これは可能性の基盤として「お母さんもきれいだから」という裏づけがあることによって可能性をより確かなものにしていく。

人とのかかわりにおいてもつ「ゆめ」を「子どもとのかかわりにおいてもつゆめ」とおきかえて考えてみると、「子どもにゆめ

をもつ」あるいは「子どもにゆめをもたせる」ということはとりもなおさず「子どもをよく知り、子どもを信じる」ことに他ならない。ところが、親や保育者は、しばしば子どもとのかかわりにおいてこのゆめをこわしてしまう。

三歳のM子が幼稚園から帰宅して母親に言った。「ママ、わたしS君のおよめさんになるの。今日牛乳瓶のふたがとれなくて困ってたら、S君がとってくれたんだもん」とすると母親は、「そんなことぐらいで嫁入先をきめていたら何度結婚してもきりがないよ」と答え、来訪者のあるたびに笑い話にした。この事例を通して考えたいことは、「事実を信じ」「可能性を信じる」ことの大切さである。

M子は女の子であるから、幼なくても「およめさんをゆめみること」はおかしなことではない。また配偶者選択の基準として「S君のやさしさ、暖かい心づかい」をあげている。これは将来の「配偶者選択の基準」においても充分考慮に値するものであろう。そうであるならば、笑い話として「ゆめ」も「希望」もとりあげてしまうのではなく「MちゃんはS君が親切だからおよめさんになりたい」と思ったのね。お母さんも親切なおむこさんは大好きよ。たくさん食べて大きくなったら、Mちゃんはやさしい女の子だからおよめさんにほしいなといってもらえるようになりましょう

ね」と共にゆめを未来へつなぐ親であることがのぞまれる。

。ものとのかかわり

幼児期の子どもの「ゆめ」は、しばしばものとのかかわりにおいても誘発される。

幼稚園に入園した子が入園式から帰って新しい十二色のパステルを出して父親に云った。

「パパも幼稚園の時、こんなパステルもらった?」「ああもらったよ」「みせて、Y子のと比べてみよう」「もうあるものかね、何十年もたつて」「だめなパパねえ、Y子はこのパステルお母さんになつてもずっともっておくよ」Y子はパステルを大事に枕もとにおいて眠った。

新しいパステルがうれしくて、おとなになるまで大切にしようとうゆめみた幼な心は、「パステルは使えば減るもの」「何十年も保管しておくわけはない」という父親のおとなの論理をこえて、幼稚園生活への「ゆめと希望」をいきいきと表わしている。Y子の場合、これまでまわりの人から与えられる「うれしいでしよう幼稚園に入って」ということばによって抽象的な期待とよるこびをいだいていた園生活が、一箱のクレパスによって一挙に具体化されみぢかなものとなったのである。

紙面の都合上、多くの事例をあげることができないが、保育者は「ゆめ」の生まれる素地を大切にし、その時を適切にとらえながら子どもと共に「ゆめ」を育てるものでありたい。次に「ゆめ」の生まれる素地としての「ゆたかさ」について考えてみよう。

幼児期におけるゆたかさは、自己、人、物との深いかかわりをもつことにおいて育成される。前期における情動的なゆたかさ、後期における知的、科学的なゆたかさは共に幼児期の子ども的心情を育てるプロセスにおいてなくてはならないものである。

一つの例をあげてみよう。幼児前期では、しばしば自己とのかわりにおいて情動的なゆたかさが先行する。虫かごの中で鳴く蟬の声を「お母さんの所へ帰りたいよー」と聞き、「暗くなっておうちがわからなくなるといけないから、逃がしてあげよう。お母さんが探しているかも知れないね」といって苦心して捕えた大切な蟬を逃がそうとする。子どもの蟬に対する思いやりの心は、「自分が遅く帰るとお母さんが心配する。お母さんが探しにきてくれる」という生活経験によって育てられた親と子のかかわりあいのゆたかさを表わしている。しかし幼児後期になると、情動的なゆたかさばかりでなく、知的科学的に裏づけられたゆたかさが必要となる。即ち蟬の生態を科学的に理解した上で「地上での生活の短かいこと」「その短かい生活の中で、父となり母となるた

めの大切な営みのあること」を思い、生命を大切にしようという気持ちから捕えた蟬を逃がすことのできる心を育てたい。更に蟬とのかかわりあいを通して、親のいない所で育つ昆虫の生態に目をむけ、お母さんがいなくて淋しいだろうと思うばかりでなく、親の保護のない所で育つ昆虫にはどんな本能のそなえがあるか、また親はどんな所に産卵しているかということから、人知ではわかり知ることの出来ない自然界の恵みや営みに畏敬の気持ちをもつことができるように育て導びくことも、知的科学的なゆたかさであると考えられる。

昆虫が好きで一日中でも虫取りをし、昆虫図鑑を調べることに熱中する子が「昆虫学者になりたい」という「ゆめ」をもった時「昆虫の形体や種別にすぐれた学者」であるばかりでなく「昆虫の生命を大切に思い、愛情をもって研究にかかわることのできる学者」になれるよう、美声に恵まれた子が「歌手」へのゆめをもった時「お金や人気や、表面的な歌のテクニクの巧みさをよろこぶ歌手」への道を薦進することのないように、心情のゆたかさを育てることが保育者の大切なつとめである。そのためには保育者自身の「ゆたかさ」が望まれることは言うまでもない。このことはま幼児教育、ひいては人間教育の基盤でもある。(つづく)

(西南女学院短期大学)